

会長就任にあたって



浅井滋生 名古屋大学 大学院工学研究科 教授

この度、第91回通常総会におきまして第47代会長に選任されました。日本鉄鋼協会は1915年に設立、野呂景義初代会長から連綿と続く伝統ある学術団体であります。この激動の時代の舵取りを託された重みをひしひしと感じております。昨年度には創立90周年事業を鉄鋼の好景気の中で滞り無く行うことができましたが、10年後に来る100周年を産学ともども隆盛の内に迎えるべく、今年度は新しい一歩を踏み出すこととなります。伝統あるこの鉄鋼協会の運営に情熱を持って当たる所存ですので、会員の皆様のお力添えを切にお願いする次第です。

「ものづくり」の拠点が欧米から日本、中国、韓国を中心とする東アジアに移りつつあることはご承知のとおりであります。その中で材料の進展なくしては「ものづくり」の発展はありません。材料の内、最も量的に大きく、かつ最重要なのが鉄鋼材料であり、その学術、技術を所轄する当協会の重みは我々の認識以上のものがあると思います。また、21世紀には発展途上国の経済発展と人口増加とが相まってエネルギー・環境問題がますますクローズアップされることは必至です。ここに於いても、わが国の鉄鋼分野で培われてきた学術・技術が大きくものを言うはずですが。しかし、この21世紀の暮らしを左右する鉄鋼関連の学術・技術が世の中で正当に評価されているかと言うと、必ずしもそうとは言えません。これは、人間が目にし、手にする等、五感に直接訴えるものを介して物事を認識する動物であるからだと思います。例えば、車を例に取れば、これを構成する部品、部品の品質を支える材料、その材料を造る製造工程と、ここまで考えが及ぶのはほんの一部の人間にすぎません。過大でも、過小でもなく正当に評価されるようにしようではありませんか。

これからの協会の運営にあたりましては、この材料の製造工程の大切さをわが国の科学技術政策に携わる方々のみならず、一般市民にも広く認識いただくことが大切だと考えます。そのためには、協会として鉄鋼関連の学術・技術の発信のための広報活動にも力を注ぎたいと思います。また、鉄鋼の生産量においては近隣国に譲るとしても、鉄鋼の学術・技術の高さにおいては、これを堅持し、日本鉄鋼協会が世界の鉄鋼材料の情報発信基地であることを、今後とも続けなければなりません。そのため、協会の顔である協会会報・論文誌発刊事業、外国会員の増強等にも力を注ぎ、「協調と競合」の精神をもって更なる国際化を進めたいと考えております。

また、金属材料系18学協会と力を携え、材料のプレゼンスの向上に努めてまいります。以上述べたこと、いずれも会員の皆様のご支援なくしては成就できません。お力添えを重ねてお願いする次第です。